「現代文化創出の「場」形成プロジェクト」

プロジェクト参加教員

菅野康太（人文学科心理学コース 准教授）、酒井佑輔（法経社会学科地域社会コース 准教授）、太田純貴（人文学科多元地域文化コース 准教授）、農中至（法経社会学科地域社会コース 准教授）、清水香（教育学部美術教育/人文社会科学研究科人間環境文化論専攻 准教授）

役割分担：菅野＝全体統括・活動の立案と実施・会計、酒井＝場づくり、太田・農中＝企画、清水＝調査・開発計画

助成額

50 万円

プロジェクトの目的

鹿児島には豊富な歴史・文化資源が存在し、近代史や近代文学、民俗学的資料を展示する施設などに恵まれている。他方、現代アートに触れる機会は極めて少ない。例えば、2021 年に鹿児島市立美術館で行われた特別企画展「フロム・ジ・エッジ ―80 年代鹿児島生まれの作家たち」は、同館で実に 20 年ぶりに行われた現代作家の展示企画である。「現代」を扱わないということは、今この時代に現在進行形で何かが生まれようとする場に立ち会う機会を逸するということである。残念ながら鹿児島には、「現代」を扱うパブリックな施設は霧島アートの森しかないと言っても過言ではない。素晴らしい施設だが、遠すぎる。そもそも興味がある人が足を運ぶ場所にならざるを得ない。意図せず、突然ふと「現代」を目の当たりにする機会というものは、若い世代にとっては人生の転換点となりえ、そのような場は日常に存在するべきなのだ。例えば、熊本市現代美術館は街中の商業施設であるビルの中にあるし、仙台市のせんだいメディアテークは市の図書館とギャラリー・メディアライブラリの機能を併せ持つ。山口情報芸術センターでは、バイオラボなども併設され文理融合型の体験型施設として教育的な貢献を果たしている。

しかしながら、鹿児島においても、グラスルーツな民間の文化事業というものは存在する。教育において公的な役割を事実上担っている本学は、未来を創出するための思考体験の場を、そのようなグラスルーツな活動と協同もしくはそれらを後押しする形で、人々に「現代」を感じる場を提供し、地元公的機関の今後の方針を率先して刺激していくべきであろう。そこで、以下のプロジェクトを提案した。過去から継承された文化・芸術と現代との連続性のみならず、未来への連続性を自ら創出する場と人を形成することで、この地域と法文学部から、永続的に文化が創出されるフレームワークを構成することを目指す。言い換えれば、鹿児島と本拠点が得意とする歴史的文化の知見を資源として、未来に引き継がれるコンテンツとなる現代文化を創出する場の形成を目的としている。

具体的なプロジェクトの内容

1. 表現としての展示企画体験：「アクティブ・ゼミ」を通して

鹿児島市加治屋町のビルにある gallery HINGE の市村良平氏を外部講師として招き、菅野が毎年前期に担当する授業・法文アドバンスト科目「アクティブ・ゼミ」において、展示企画を行なった（成果参照）。多くの学生は、情報発信の体験以前に、そもそ

も展示などの文化発信の場に赴いた経験が乏しいということを、この数年実感している。これは、鹿児島における企画と場の少なさに起因しており、他都道府県の学生と、感性の形成をする上での体験の差となってしまう恐れがある。それを補う形で、本授業をこの先も展開する予定であるが、今年度（令和 5）もすでに、昨年度に本プロジェクトに参加した学生が数名、再度参加をするかカタチで本授業が進行している。

2. 学内における「場」の創出：法文学部棟 2 号館改修を機に

法文学部 2 号館の改修に伴い、酒井と菅野がラーニングコモンズ 2 部屋の新設を担当した。そのラーニングコモンズの壁に、ここに集う人々の創造性を刺激するイラストを施した。本学理学部の卒業生で、全国的に活躍する鹿児島在住のイラストレーター・篠崎理一郎氏に、そのイラストを依頼した。近年、鹿児島県内にもコワーキングスペースが新設されている（例えば県庁や鹿児島銀行新天文館支店、Li-Ka など）。このような施設は、様々な人々が業種を超えて交流する中で、新しいものが生まれることを志向するクリエイティブ空間であり、ラーニングコモンズにも同様の機能が求められる。本学卒業生の作品で刺激を受けながら、ときに卒業生をロールモデルにしながら、学生が未来を創る場としていきたい。篠崎氏のイラストの他にも、今後ここでイベント企画を行うために家具などを設置した。

3. 学外との連携による新たな文化創出・新しい薩摩焼の素材開発

鹿児島には、グラスルーツな現代的試みが存在する。例えば、音楽フェスの GOOD NEIGHBORS JAMBOREE、器や伝統工芸品の作家も含む様々なクリエーターが作品を発表するデザインとクラフトのイベント ash Design & Craft Fair などである。また、昨年は、照国地区のいわゆるかごしま文化ゾーンの店舗や公的施設（黎明館、県立図書館、市立美術館、県立博物館、かごしま近代文学館／かごしまメルヘン館、宝山ホール、県民交流センター、鹿児島市中央公民館）のメンバーが「かごしま文化ゾーンフェスティバル 2021」という新たな企画も立ち上げた。

これらイベントの運営者からは、たびたび「鹿大/鹿大生と何かできないか？」とお声がけを頂く。しかし、共同プロジェクトとして結実することには日々困難を感じざるを得ない。そのような中、美山で制作をしており、上記イベントにも度々出展している県内の陶芸家・城雅典氏から「新しい薩摩焼の素材の探索・開発を一緒にしてくれる研究者はいないだろうか」と相談を受けた。このプロジェクトが実現すれば、鹿児島の歴史性と未来を同時に探究する課題となり得るだろう。新たな産業の発展に寄与し、また、薩摩焼から見た歴史や文化の再発見や発信など、他のプロジェクトとの相乗効果も期待できる。現在、実現に向けた調査の計画を開始したところである。

具体的なプロジェクトの成果

1. 法文アドバンスト科目「アクティブ・ゼミ」で実施した企画展「見えかたがわからない」2022 年 8 月 10 日-8 月 14、gallery HINGE

詳細・イベントレポート

https://sites.google.com/view/kadaihoubun-az/wakaran

https://kadai-houbun.jp/seminar_info/220831-01/

（左）イベント告知イメージ（インスタグラム用）　（右）展示の様子

2. 篠崎理一郎氏のイラストが描かれたラーニングコモンズ 1